



Title	日本における中国人の身装の変遷：日清戦争後に来日した中国人男子留学生を中心に
Author(s)	劉, 玲芳
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 69-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89859
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本における中国人の身装¹の変遷

——日清戦争後に来日した中国人男子留学生を中心に——

劉 玲 芳

〈キーワード〉 男子留学生 弁髪 学生服 和服

1. はじめに

日清戦争をきっかけに、日中の関係が逆転し始めた。長年、中国を師としてきた日本が優位な立場になった。この立場の逆転によって、当時急速な勢いで国力を高めていた日本を、中国は再認識することになり、やがて日本に学ぼうとする動きが始まったのである。その結果、日本を見学したり、留学を目的として渡日したりする中国人が、一気に増加した。

日本と中国、いずれの国においても、「留学生」が研究対象として注目されている。そして彼らを対象とする研究もけっして少なくはない。たとえば、日本語の研究資料を用い、詳細かつ系統的に中国人の日本留学の歴史を語った実藤恵秀『中国人日本留学史』(1960、くろしお出版)はその代表例である。その他にも、中国人の断髪に焦点を当て、近代東アジアの文化衝突を論じようとした劉香織『断髪近代東アジアの文化衝突』(1990、朝日新聞社)などもある。他方、中国語の研究資料を用いた研究には、清朝末期の留日学生を中心に考察した黄福慶『清末留日学生』(2010、台湾中央研究院近代史研究所)や、留日作家の創作や作品を中心に留学生のイメージを考察した朱美録『域外之鏡中の留学生形象』(2011、巴蜀書社)、そして1896年から1945年の間における留日学生の教育活動をまとめた汪丞『近代中国人日本留学活動史』(2013、湖北教育出版社)などが代表として挙げられよう。これらの研究はいずれも主に留日学生の歴史や教育活動などを中心に論じたものであるが、その中には本研究に関わりのある留学生の服装や髪型に関する記述や論述が散見される。

本稿と直接関係のある先行研究には、留学生の生活、とりわけ服飾について詳しく考察した酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』（2010、ひつじ書房）がある。その第5章「留学生生活の壁」においては、「食」「住」の壁とともに、「衣」の壁として、中国人留学生の「服装と弁髪」が取り上げられている。

ただし、酒井が論じた衣服の壁というのは、あくまでも中国人男子留学生における日本滞在時の衣生活の一面に過ぎない。酒井の論では、男子留学生が日本人の身装文化を受容した一面について言及されておらず、さらには、留学生の身装意識の変遷過程についても看過されていた。確かに、留学生の衣服に着目した際、そこには日中両文化を分け隔てるような「壁」が存在していたことは紛れもない事実である。しかしながら、そこには日本人の身装文化の受容や、男子留学生たちの身装の変容が存在したのもまた事実である。とりわけ、異国で生活する男子留学生の身装文化の変容の背景には、彼ら自身のコンプレックスが隠されていることを見逃してはならない。

本稿は、日清戦争後に来日した中国人男子留学生たちが身装の問題に直面し、時には内面的葛藤を抱えながらも、最終的に日本の身装文化を受容していく過程を詳細に論じたものである。本稿によって、これまで必ずしも明らかにされてこなかった中国人留学生の身装意識の変遷が、より具体的に明示されるだろう。では、まずは日清戦争終戦後の状況から見ていこう。

2. 清末留学生の身装文化にみる日中の摩擦

日清戦争終戦後の翌年から始まったことだが、日中双方の教育熱心な政治家や教育家の努力によって、清国は日本に留学生を派遣するようになる。これは、敗戦によって清国が日本からかなり大きな刺激や教訓を受け、変革する必要性を自覚したこと起因するものであり、日本を通じて中国における近代化の道を模索しようとしたものであった。ところが、留学生が次々と来日するにつれ、様々な問題が生じた。当時、清国人の教育に熱意を示す日本人は決して少なくなかった。ただ、日本社会全体としては決して友好的な環境とは言えない状態であったこともまた事実である。それは留学生の予想を遥かに超えるような厳しいものであったようである。

2-1. 清国人の身装問題

最初期に日本に渡った男子留学生は、当然、言葉や食物、習慣や人情風土など、様々な文化的な違いを実感したに違いない。だがそれらにも増して、彼らをもっとも悩ませたのはほかならぬ外観、つまり服飾の問題であった。

1896年5月中旬頃、清国の最初の13名の留学生が日本に派遣された。彼らはいずれも国に選ばれた非常に優秀な官費留学生、つまり、自国では超エリートであった。だが日本では、戦争に負けた清国人であるという理由で、軽蔑や嘲笑の対象となることが多かった。こうした理由からだろうか、入学してから2、3週間も経たないうちに、13名中4名が途中で留学を諦め、帰国するという事態が起こった²。実藤恵秀は、彼らの帰国の原因について、彼らの外観がよく冷やかされたことが一つの大きな要因だったと指摘している。実藤はその根拠として、実際、当時男子留学生の弁髪をめぐるトラブルが頻繁にあったとしている。

ところで、当時、日本人に冷やかされたという、清国留学生の身装はどのようなものだったのだろうか。その点を明らかにするために、最も早く清国留学生を大量に受け入れた日華学堂の留学生の身装がどのようなものであったか確認しておこう。

日華学堂という教育機関は、1898年6月に高楠順次郎（当時東京帝国大学講師）によって創立された学校である。また、その創立の趣旨は「専ら清国学生を教養し、務めて学生をして速やかにわが言語を講習し、わが風俗に暗熟し、並に普通各科の学を修めして、而して専門各科を修むるの地歩たらしむ」というものであったという³。『日華学堂日誌』（日華学堂の創立から廃校までのあいだに記された公式的な日記である⁴）には、1898年10月7日の午後、ある洋服屋が学堂に来て男子留学生たちの洋服を作るために、彼らの身体測定を行ったことが記載されている。この記述から、男子留学生たちは日華学堂に入ってから洋服が仕上がるまでの間、清国の長袍を着ていたということが容易に推測できる。実際に、最初に日本に留学に来た清国留学生の写真が残っている。写真では、3名の日本人教員が一列目に座っている。その後ろに、右から、唐宝鏐、馮閭模、朱忠光の3人が立っている。前の日本人教員が和服や学生服に近い制服を着ているのに対し、後ろの清国留学生の全員が清国の伝統的な長袍を着ている。さらに、髪

型も弁髪のようなものである。ここから、当時の男子留学生は清国人の身装文化を保ったまま日本に留学してきたことが窺える。しかしながら、そのために、日本人との間に文化的摩擦が起こったのである。当時の日本と中国の身装文化はあまりにも違いすぎたのであり、そのため当時の中国人の身装文化はかなり奇異で異様、そして特殊なものとして、日本人の目に映ったのであろう。

実際に、男子留学生が身装の問題に遭遇した体験が、彼ら自身が書き残した日記に記されている。たとえば、弁髪のため、日本人に嘲笑された体験談を書き残している留学生がいる。1903年に日本に渡り、第一高等学校に入学した景梅九（中国同盟会の会員、ジャーナリスト）という学生である。彼は『留日回顧』に次のような記述を残している⁵。それは彼がほかの留学生の仲間と一緒に初めて長崎に上陸した翌日、名所見物をした際に起こった出来事であった。「ちょうど町を歩いているとき、ふいにいく人かが指さして笑ったり、また、たくさんの子供がついてきて、『チャンチャン坊主』とさわぎたて」られたりした。彼はまだ日本語がわからなかったのもので、その意味を通訳に聞くと『豚のシッポ野郎』と言っている」と教えてくれたという。この時は、特に事件などが起こったわけではなかった。だが、彼が第一高等学校に進学した後に、大勢の日本人学生が、彼によく話しかけてきた。言語が通じなかったのもので、漢文を介して筆談で会話していたようだ。その筆談の中で、数人から「辮髪はみつともないから切ったらよからう。われわれは豚のシッポといってるんだ」と言われたという。このような体験から、景梅九は自らの身なりに羞恥心を抱くようになり、すぐに断髪を行った。

もう一つ別の例を見てみよう。1905年に来日した黄尊三の日記である。彼は弘文学院に入学したが、一ヶ月ほど経った時の日記で「我々は日本に来たばかりで、服装がきちんとしていない。それがために、外国人から笑われる。それは外観のことではあるが、国の体面に関わることだ」と述べている⁶。ここには、「服装がきちんとしていない」と書かれているが、官費留学生として日本に渡った清国人はけっして貧乏な人ではなく、立派な衣服を日本に持参してきたはずであり、その服装は当然笑われるような粗末なものではなかった。しかし、奇異な清国の服を着ていた留学生たちは、「外国人」の日本人に嘲笑され、冷遇されたの

である。彼らにとってそれは、自分を貶められることであると同時に、「清国」をも嘲笑される行為と感じたようである。黄尊三の記述によってそれがわかる。

このような留学生の身装問題は彼らの留学生活に大きな影響を与えていた。そこで日本の学校も、できるだけ早く清国からの男子留学生の服装を変えようとしたようだ。たとえば、前述した日華学堂では、弁髪事件（1898年10月7日）が起きた日、つまり洋服屋が寸法を取りに来た日から18日後の同月25日に洋服商に仮の洋服を学堂に持ってこさせ、さらに4日後の夜に新しく作られた正式な洋服を留学生に配っている。つまり、弁髪事件からほぼ1ヶ月が経ってようやく日華学堂の男子留学生は長袍から洋服に着替えることができたことになる。それ以降、日華学堂では新入生の来日直後に、洋服屋に頼んで学生の採寸を行い、洋服を製作させ、学生服を着させるという流れが定着していった。念のため記しておくと、日華学堂は、洋服を武田洋服店、帽子を櫛商店、洋靴を宇田川店に依頼していたようである。

こうした流れが定着したものの、留学生たちには抵抗感や葛藤はなかったのであろうか。もしあったとすればどのような点に強く違和感を覚えたのだろうか。こうした点について次に考えてみることにしよう。

2-2. 初期における男子留学生の抵抗

先にも紹介したように、清国の男子留学生が来日した初期の段階では、様々な身装問題が起こった。このような状況の下で、日本の学校の制度に従いながら、洋服以外のものを着用するとすると、日本人学生の制服を着ること、それ以外に選択肢はなかった。

ところが、身装文化に強い政治的な意味、ないしはアイデンティティが包含されていた当時の状況下において、清国留学生はたやすく日本の学校の制度や習慣を受け入れたわけではなかった。とりわけ、当時、清国人男性の一つのシンボルとして見なされていた「弁髪」に関する問題は留学生の間で最も意見が分かれるものであった。それは、弁髪が清国の時代においては単なる髪型ではなかったからだ。これは弁髪であると同時に、非常に政治色の濃いものであった。つまり、弁髪を保つということは単に一種の風習を保つことではなく、それ以上に個人の

運命と出世を左右するものでもあったのだ。有名な例の一つ挙げておこう。魯迅の『藤野先生』という作品には、「頭のとっぺんに長い辮髪を巻き上げているので、学生帽の頂上が高くそびえて、富士山になっている。辮髪をほどいて、平らにつけているものもある。帽子を脱ぐとジェルを塗ったようにてらてらと光っており、若い女性の髪のようなものである。首をなまめかしく振ったらしたら、妖艶極まりない」という箇所がある⁷。『藤野先生』は、中国へ帰国後、魯迅が雑誌『莽原』に発表した1926年12月10日付の文章であり、その内容は仙台の医学専門学校における恩師の藤野先生を懐う回想文である。この引用文は1902年に渡日した魯迅が、東京弘文学院へ留学していた頃の見聞だと思われる。上野公園で魯迅が見た留学生の多くは、実は短時間だけ日本に滞在して、留学経験という経歴を活かして、帰国後に出世しようとしている速成科の人たちであった。彼らは短期間だけ日本に留学し、帰国するわけであるから、容易に弁髪を切ることができなかった。もし切れば、帰国後に困るからである。

同様の記述が1906年に出版された夢芸生のノンフィクション『傷心人語』にも見られる。「東京支那留学生之現象記」(第7章)には、「辮髪を頭の上に巻きあげ、帽子をかぶった様子はまるで山のように見える。(東京に来て辮髪を切るのが嫌だと言う人がいる。彼らは辮髪を頭の上に巻き、髪が多い者が、かぶった帽子の上に尖った形になり、非常に醜い)」という記述がある⁸。最初に留学に来た清国留学生たちが「チャンチャン」と呼ばれていた日本社会で、彼らは様々な違和感を抱いたに違いないが、彼らの多くは帰国後に役人を目指していたため、断髪することはなかった。その結果、帽子が「富士山」のようになる髪型が、彼らにとっての折衷策となったのだ⁹。しかし、このような異様な光景は当時の日本人にとってはもちろんのこと、どうやら同じ清国留学生にとっても羞恥心を感じさせるものであったようだ。だからこそ、魯迅のように早く日本文化に溶け込んで、いち早く断髪した留学生にとっては、揶揄する好対象となっただろう。

一方、弁髪の問題のみならず、服装をめぐる問題もあった。前述した夢芸生の『傷心人語』には弁髪のこと以外にも、様々な問題があったことが書かれている。たとえば「上下洋服を着ているが、雲模様の緞子織の靴を履いている者が居る。

また、外に和服（日本人の幅広い袖の衣服は和服と称す）を、うちに上品な緞子の清国風の長袍を着ている者がある。さらに、冬になれば、身体にぴったりする皮あるいは綿入り袖なしの服を数枚着た上に、制服を羽織る学生が居り、その大きくてぶくぶくしている様子が牛の化け物よりおかしい¹⁰といったような記述がそれである。これは留学生が発明した和中混合の衣服であるが、表面上、あるいは一見すると洋装もしくは和装というように思われるものの、よく見ると足元や隠れた場所には清国風のものを着ていたのである。このような記述から考えると、当時、すべての留学生が日本人の衣服風俗を何の抵抗もなく受け入れたわけではないことがわかる。少なくとも一部の留学生は、多少とも抵抗を示していたものと考えほうがより適当な解釈だと思われる。もちろん、このような抵抗には二つの意味が読み取れる。一つは、食べ物や習慣などと同様、日本人の身装文化には馴染んでいないものの、学校のルールや社会の雰囲気にはどうしても従わざるを得なかったので、表面だけは日本風にしたというもの。もう一つは、思想や心理的な面から中国の身装を優位だと認め、表には出さないが、人が気づかないところでは中国の身装を用いるということ。この二つの意味が考えられる。このいずれであるにせよ、彼らの身装は、周囲の日本人にとっても、また同じ清国の同胞たちにとっても異様な存在と感じられたのである。

この現象を辛口に風刺した夢芸生は、さらに「凡そ人の装束は洋風にしたい場合は全身を洋風にすべき、日本風にしたい場合は全て日本風にすべきだ。つまり、全体的に統一した方が良い。たとえ、あまり個人の外観を気にせずとしても、他国で留学しているので、自国の名誉を傷つけてはなりません」と主張している。これは、前述した黄尊三の見方とほぼ一致するものである。

こうして、日本留学がブームになった1905年から1906年の頃、一部の留学生の間に身装文化が単なる個人の問題でなくなり、清国及びすべての清国人の名誉に関わるほどの大きな問題である、という意識が形成されたものと推察される。

3. 清末留学生の受容の諸相——断髪・学生服・和服

前章で述べたように、弁髪、または身装の折衷策を考えた人はいたものの、実

際には日本人の身装文化を受容した留学生の方が多かった。

1902年7月1日付の『朝日新聞』の記事には、東京神田錦輝館において清国留学生向けの談話会が開催された際の彼らの様子が記されている¹¹。記事によれば、当日は300名余りの留学生が参加したが、その中には「学校の制服を着け、散髪は各自の好みに刈り込み中にはモミアゲを剃り上げ、高襟に首もまはらぬ当世紳士を気取るものすらあり。多くは辮髪を頭に巻き上げ帽子をもて覆ひ一見本邦学生と異なる所を見ざりしも、昨今着京のものは依然長袖寛衣なるものもあり」と書かれている。この記述から、清国男子留学生にも様々な格好をしたものがいたことがわかる。学生服の人がいたり、長袖寛衣といった清国の伝統的な衣服の人がいたり、そうかと思えば散髪した人がいたり、弁髪そのものを帽子で隠す人がいたりする、といった具合である。ここから、異なるグループの身装にそれぞれの意味が読み取れる。たとえば、日本の学生服を受け入れた人は受容派と見做されていただろうし、弁髪を切らずに帽子で隠す人は折衷派と思われるだろう。それ以外の者は、談話会が開催する直前に到着した留学生であるが、彼らは中国の伝統的な長袍をそのまま着て出席しており、あえて分類するなら未所属派であると言えよう。

日本人の身装文化に関して留学生の見方が分かれていたこうした状況下において、明治政府の洋装化政策を高く評価し、それに倣った清国の服飾改革を希求する者が現れ始める。1903年1月に湖北籍の留学生によって東京で創刊された『湖北学生界』という雑誌には、「辮を剪り服を易える説」の文章が掲載されている。その内容を見てみると、「今之辮服牽掣行動、妨碍操作、遊歷他邦、則都市譏笑」¹²というように、清国人の弁髪と長袍は実用面で不便があるだけでなく、他国に遊歴する際には嘲笑され恥をかくといった不利な点があるという指摘がなされている。続いて、「明治初年、東瀛士族心醉欧風。若飲狂泉、服饌起居、極意倣効。其得力實在於此。（中略：引用者注）若令剪辮易服、革故鼎新。薄海臣庶、聴睹一傾。咸曉然於朝廷銳意變法、堅確不移。凡百新政、自無不實力奉行」¹³というように、日本の明治維新の政策と比較して、中国の維新が失敗した理由を、髪型や服装に固執し、速やかに改変しなかったせいだと断言するのである。つまり、この文章を書いた留学生によれば、もし清朝廷が日本に倣って、弁

髪を切らせ、服も変化させることができれば、官僚らも庶民も朝廷の決心を理解して、多くの人たちが改革に力を貸すだろう、と言うのだ。また、清国の服装には煩わしい規定があり、お金がかかるので、衣服のために大金を使い、賄賂を受け取った官僚が少なくないとも指摘しており、「辮を剪り服を易える」とすれば、官僚らの奢侈風を治めることにもなると言う。それに加え、清国の軍人の制服、身体衛生の視点、また洋服を通じて外国人との親和友好の関係を維持するといったような利点が考えられることから、速やかに「辮を剪り服を易える」ことが望まれると主張している。これは身装の問題を、個人の名誉や政治、官僚問題、軍事、衛生、外交などあらゆる方面と関連させたものであり、それが清国の維新の失敗にも及ぶと言うかなり乱暴で短絡的な論である。とは言うものの、ここで重要なのは、こうした身装問題が、確実に留学生たち自身によって意識化されるようになったことであり、失う不利益よりも利益の方が大きいと考える者が出現してきたという事実である。もっとも、まだこのような批評は、ごく一部の者に限られており、多くはなかった。とはいえ、時代は確実に変化したのである。

3-1. 弁髪から断髪へ

この頃、富士山式の髪型をしている折衷派の留学生もいたにはいたが、実は断髪する留学生も増えていた。魯迅もその一人で、彼は切った弁髪を日本に残し、半分を下女にあげて鬘に使い、半分を床屋に残したと「病後余談——舒憤懣」に記載している¹⁴。魯迅以外にも、何人かの留学生が自分の断髪体験について記しているのをそれを見てみよう。

前章で紹介した景梅九という留学生もそうであった。彼は1903年頃に日本に渡り、本郷の第一高等学校に入学して間もなく、床屋で弁髪を切ってもらった。彼はその様子を『留日回顧』に詳しく書き残している。

坐ってから右手の食指と中指で、鉢の恰好をして、辮髪を根本を挟んでみた。その床屋さんはこの指話がわかったらしく、にやにやして鉢を持ち、一思いに悩みのたねの辮髪を断ち切った。ついで残ったてっぺんの髪もきれいに刈ってしまった。まもなく、向かいの鏡の中に坊主頭があらわれ、自分で

も思わず吹き出した。それからジャーッと頭に水を注いで洗ってくれたので、いっそう爽やかに感じた。¹⁵

前章で述べたように、景梅九は日本に来てから、弁髪で日本人に笑われたことが何度もあった。その彼がようやく決心して弁髪を切り落としたのだ。ところが、当時、景梅九の周りでは、断髪の人はまだ珍しかったようだ。その証拠に、彼が学校に帰った時、弁髪を切り落とした彼を見た同窓生たちは、「冷笑するのもあり、好いというものもあり、また『身体髪膚之を父母に受く、毀傷すべからず』と『孝経』の文句をいうものもいた。また髪を切るのは革命党だというものもいた」というような様々な反応を示している¹⁶。中には、髪を切ることが清朝の伝統思想から乖離した行為であり、断髪の人が「革命」思想を持つ進歩派だという見方もあった。ところが、何日か後には、他の留学生たちも次第に弁髪を切り始めるようになった。その結果、弁髪を頭の上に巻いて、たぶさにした人の方が少数派になったという¹⁷。

景梅九に2年遅れの1905年に来日した湖南省出身の黄尊三は、弘文学院に入学した日にさっそく弁髪を切り落とした。彼の『留学日記』には、「我々はこの日、髪を切り落とした。僕も切り落とした。大変軽快な感じ」と記している¹⁸。魯迅が渡日後の翌年に髪を切り、景梅九が同級生に何度も嘲笑された後によく断髪したのに対し、黄尊三は入学後すぐに髪を切っている。この間わずかに2、3年ほどしか経っていない。留学生の間に急激な勢いで断髪という行為が行ったことがわかる。

やがて、日本に到着する前に、弁髪を切り落とす者も現れることになる。魯迅の弟である周作人もその中の一人であった。彼は魯迅の影響を受けたようだが、日本に行く前、上海に着いた直後、理容師に弁髪を切ってもらい、乗船して日本に渡ったのだという¹⁹。

以上、見てきたように留日学生の断髪の間緯や実態には実は様々なケースがあった。早々に日本の断髪の間習を受け入れて自ら髪を切り落とす場合や、周りの環境の影響によって切らざるを得なかった場合、さらに直接的に日本の間習に接していないものの、断髪した人から影響を受けるという場合もあったようだ。

この段階において、彼らの断髪に革命の意思が含まれているかどうかはまだ読み取れないところである。だが、断髪した後の感想について、黄尊三が「大変軽快な感じ」と述べているように、弁髪を切ることによって彼らが何らかの解放感を感じている点は共通している。この時期は、清国政府の求心力と国際的評価の低下が一方であって、もう一方では日本が着実に国力を伸ばし、また日露戦争にもかろうじてではあるものの勝利したことによって評価を上げていくという時代に当たった。こうした両国の状況の変化も、留学生たちの身装文化の変容を加速化させた要因であったのかもしれない。

3-2. 高価な学生服

強い政治的な意味合いを持つ弁髪について、男子留学生は日本人の嘲笑を受けながら不便を感じ、しだいに断髪するようになっていった。では、髪型以外のところにも同様の傾向が見られるのであろうか。それを確認しておこう。

少し第2章の話に戻りたい。初期に来日した清国の男子留学生たちは、髪型や服装に関する様々な問題を経験したということを述べた。それらの問題を解決するために、日華学堂のような学校はいち早く男子留学生の服装を洋服に変えようとしていた。ところが、なぜ男子留学生に洋服を着させたのか、また洋服以外に、彼らはどのような服装を着用していたのか、それらを明らかにするためには、まず日本の学生服について説明しておく必要がある。

1879年頃に学習院が男子学生の制服を採用し始めた。その学生服はプロシアの軍服をもとに考案されたものと言われており、詰襟・五つボタン・箱ポケットまたは雨蓋（フラップ）ポケットつきの上衣と長ズボンというスタイルであった²⁰。そして、1886年に、帝国大学が詰襟金ボタンの制服と制帽を定めることによって、後にこれが学生服の形式として全国に広まることになる²¹。男子留学生が日本に来る場合、学校に入学することによって、日本人学生と同様に学生服（学校の制服）を着用することが一般的であった。ただ、最初に来日した男子留学生たちは、はたして日本人学生の制服文化について知っていたのだろうか。かなり疑わしい。実際に、前章で述べたように、1900年代以前、初期の男子留学生が日本に渡来する際、彼ら全員が長袍に弁髪という格好で来日していた。だ

が、そのために様々な身装問題が起きたわけである。それはともかくとして、先に述べた日華学堂の場合、男子留学生に着させたのは学生服でなく、背広のような洋服であった。これは、日華学堂が予備学校であるため、中等教育あるいは高等教育の機関のように制服を持つことができなかったためと考えられる。

では、高等教育機関の場合はどうだったかと言えば、たとえば『留学早稲田大学己酉畢業生紀念写真帖』の中の写真からその姿が窺える²²。この写真帖の中には、1909年に早稲田大学を卒業した100名の清国人の写真が載せられている。筆者が確認したところ、100名の中学生服を着ている人は35名、学生服の上に洋風のコートと合わせて着ている人は21名であり、これらを合計すると56名となる²³。つまり、半分以上の人が、具体的には56%の清国人が学生服を着用していたのである。総じて言えることは、欧米へ留学する者たちは背広の文化を受容した。あるいは受容せざるを得なかった。それに対し日本にいる男子留学生が受容したのは背広などの洋服ではなく、学生服であったのだ。

この頃、清国では、制服を含む日本の学校の情報を伝えるために、多くの日本留学の案内書が大量に出版された。これらの書物は、初めて日本に渡る清国人向けのものであったため、主に中国語で書かれたものだった。当時の清国人たちにとって、これらはかなり実用的であり、重宝された書物だったと思われる。

まず、清国留学生の章宗祥によって編纂された『日本遊学指南』（1901、以下『指南』と略す）を見てみよう。著者の章宗祥は1899年1月20日に、日華学堂に入学し、後に東京帝国法科大学を卒業し、中華民国の駐日公使に任ぜられた人物である。『指南』は彼が東京帝国法科大学を在学中に書かれた本であり、当時既に出版された『東京遊学案内』という本に倣って編纂されたものである²⁴。その中には第3章「遊学之経費」の第5節「衣服費」について、以下のような記載がある²⁵。

衣服費 日本の学校には制服というものがある。ここでは普通の制服について記す。

金額がやや大きい、入学の最初の時にだけ必要なもので、毎年新調する必要はなく、あとは随時補填すればよい。

冬服 一揃 約八円から十円

外套 一着 約八円から十円

夏服 一着 約三円から六円

帽子、靴、シャツ等 約五円前後²⁶

ここからわかるように、章宗祥は自分の経験を通して、後に渡日する同胞たちに留學生活の情報を伝えている。彼の記述によれば、当時の清國留學生は日本の学校の規定に従うことが必要であり、したがって制服を着用することが一般的であった。もちろん、ここの制服というものは前述した中等学校や高等学校に進學後に、着用できるものだったと考えられる。少し金額に注目してみると、これは決して安いものではなかった。なぜかと言えば、1年に學生服にかかる費用はなんと最小でも24円であるからで、これは1年の學費の倍以上もする高価なものであったからだ。ただし、高価なものであるためか、最初の1年に作れば、毎年新調する必要はないとも、文中には特筆されている。

日本人によって出版されたガイドブックもいくつかある。たとえば、1905年に出版され、日本人が編纂した最初の中國語の留學指南と言われている『日本留學指掌』（以下『指掌』と称す）が挙げられる²⁷。この書は2編に分けられており、その第1編は学校の選択、入学試験、授業料、下宿料など日常的かつ必要な情報を提供しており、第2編は男女双方の官公私立諸学校に関する学校について詳しく紹介している。その中の第1編の7番目には、留學生の衣服に関して、「制服与制帽」という項目が設けられている。そこには以下のようなことが記されている²⁸。

学校而規模大者。必有一定之制服。制服以自費弁之。冬衣八九円。夏衣四五円。制帽一円。外套拾円。靴与襪子五円。其他襯衣之類二円余。通計三十余円而足以。

訳：規模が大きい学校であれば、必ず制服を定めている。制服は學生の私費で作られる。冬着は八九円、夏着は四五円である。制帽は一円、外套は十

円、靴及び靴下は五円である。その他のシャツ類は二円くらい。合計三十円くらいで十分である。²⁹

この紹介文の内容を前述した章宗祥の『指南』に紹介した服装の部分と比較すれば、少し簡潔な印象がある。この理由について考えられるのは、この書物が出版されたのは『指南』が出版された4年後のことであり、この頃には日本へ留学生しようとする者たちにとって、日本の制服のことがある程度認知されていたからだということが推測できる。

金額に目を移すと、冬着や外套が10円であり、他のものと合わせてすべてを揃えると30円くらい必要となることになる。ところが、その次の項目「八 留学生費用月額与年額」を見ると、授業料や寄宿料、書籍費及び筆墨費、雑費を全部合わせても、月額15円から25円50銭であり、年額は180円から306円となることがわかる。つまり、服飾関係の費用は、留学生のほぼ1年間にかかる費用の10分の1から6分の1ほどに相当することがわかるだろう。年額に占める割合から見れば、1901年頃の学生服より、この頃の学生服は安くなったかもしれない。だが、これでもなお実際にはまだまだかなり高価なものであったようだ。それを窺わせる記事がある。たとえば『学生タイムス』の記事によれば、1907年頃に官費留学生が公使館から毎月受けている官給は35円であった³⁰。ということは、留学生が入学した際に購入する制服の費用は、官費留学生のほぼ一ヶ月分の生活費と同じくらいの値段がするものであったことになる。

その実情はある留学生の日記から垣間見える。前述した黄尊三は、1908年8月27日付の日記で、ある新聞記事から某医者の3人家族の家計が1ヶ月24円であることを聞き、自分の家計を反省している。彼は毎月貰っている官費留学費が33円であり、「家賃（食事を含む）十円、食事追加代 二円、来客の食事 二円、（中略：引用者注）、髪剃り 二銭、洗濯 四銭、衣服・靴・靴下 二円」と書いている³¹。彼自身、医者 of 家庭に比べ、かなり贅沢な生活をしていることに気づいた。3人の1ヶ月の家計が24円であるのに、独り身であり学生である自分が1ヶ月に使うお金が、それ以上であったからである。

ここまで見てきたように、年ごとに官費留学生がもらえる官給は若干異なる可

能性があるとしても、大体 30 数円であった。この金額は清末時期の男子留学生の学生服に使った最低の基準だと推測できる。

さらに、『指掌』が出版された翌年の 1906 年には、『東瀛遊学指南』が出版されており、その中には、留学生の服装に関して、「国各異俗服装亦異。日本学校取法泰西各有制服。諸君来時中国衣服勿携帯為便宜。此有洋服已足多携亦無所用之也」と述べられている³²。この資料は中国服が日本では無用なものになるという理由で、中国の衣服を持参しないことを強く推奨している。この時期にはすでに、中国服は留学生にとって無用なものと思われるようになっており、そこから中国服が留学生たちの衣生活から完全に排除されたと言えるだろう。

留学生は学校に行く時に学生服を着用していた。これは学校も定めているから当然のことである。では、それ以外の時間、彼らがどのようなものを身にまとい過ごしていたのだろうか。それを次の節で見てみよう。

3-3. 和服への評価

前述したように、留学生が来日した時代は、日本の学校の制服文化が発展しているところであった。したがって、好むと好まざるとに関わらず、彼らは制服の文化に巻き込まれないわけにはいかなかった。だが、学校以外の時間においては、彼らが自分の衣服を自分で選べる自由は当然あっただろう。上の節で述べたように、予備校に入学した留学生のほとんどは洋服を着ていたと考えられるので、すでにある程度洋装が普及していた日本においても、一部の留学生は洋装をしていたということが想像できる。ところが、彼らの中では、どうやら和服の方が人気であったようだ。

例を挙げておこう。前述した『日華学堂日誌』の 1899 年 7 月 23 日付の日記に、「陳玉堂浴衣、兵児帯、白足袋、日本的服装ヲナス」という文言がある。これは成城学校から来た多くの留学生中の一人の服装について描写した箇所である。注目された理由は、その留学生が和服を着ていたからである。つまり、和服を着た陳玉堂という学生が当日の『日誌』を執筆した日本人に、深い印象を残したことがわかる。当時、来日した留学生は洋服か学校の制服かを着るのが一般的だった。そうした中で和服を着る人がやはり珍しかったのだろう。こうした理由

がこの記述に繋がったのである。ところが、陳玉堂より7年ほど遅れて日本に来た周作人にとって、和服はむしろ身近なものであった。彼は前述したように、日本に渡る前にいち早く上海で断髪した人物であった。そして、1906年から1911年までの6年間の留学期間において、彼は登校の日には学生の制服を着用し、普段の日には和服に下駄を履き、雨の日のみ革靴を履くが、後に足駄を履くようになったという³³。これだけでなく、周作人の著作には和服についての記述が間々見られる。たとえば、彼は当時の留学生の和服に対する見方を「東京を懷う」という回想文の中に書き残している。

当時の私はまた民族革命の一信徒であつた。凡そ民族主義は必ずその中に復古思想を含んでゐる。我々は清朝に反対し、清以前或は元以前のものは大抵何でも良い様に思つてゐたから、それよりも更に以前のものは尚更のことである。かういふ理由からして私達は和服を着ても一向差支へがないと思つてゐた。もしそれ袍子、馬褂の如きに至つては民国以前には皆北方夷狄の服に見倣され、東京でそんな衣服を着るのは奴隸の表徴であつた。弘文書院の写真で（その中には黄軫、胡衍鴻もあるが）前列の端の方に楊哲子が袍子馬褂を着て写つてゐる。これには当時の人々は甚だ驚かされたものである。³⁴

周作人は、当時の民族革命を支持する立場にいる留学生の考え方を明確に示している。つまり、清朝男性のシンボルとなる袍子馬褂はもはや新しい時代に適した服装ではなくなっているだけではなく、むしろ昔の支配層であった漢族人にとっては夷狄が着るような野蛮服のようなものであると述べているのだ。こうした見地から周作人は、新しい思想を持ち、新しい時代を作っていくはずの留学生には、袍子馬褂よりも、むしろ唐の時代の身装に強い影響を受けた和服の方が好ましいと述べているのである。また、記念写真を撮った時に、楊哲子という人が清国の袍子馬褂を着ていたので、他の進歩派の留学生にかなりの衝撃を与えたことを強調して書き残している。

また「日本之再認識」という一文において、周作人は「我々は日本にいる間の感覚は、半分は異域、半分は古昔である。そして、この古昔は健やかで異域で生

きている。ゆえに、夢のような仮想ではなく、朝鮮ベトナムが模倣した中国服と異なる。この理由のため、私たちは和服を着ても構わない。たとえ袍子馬褂は民国以前に夷狄の服と見做されたとすれば、章太炎先生が最初に日本に来て撮影した写真を『民報』に掲載されたのは和服の姿であった。このことから、当時の社会の雰囲気をつかえるのではないか」と述べている³⁵。周作人を代表とする当時の日本の文化に関心を持ち、積極的に日本の文化を受け入れようとする留学生にとって、和服を着ることで、昔の中国人（唐代の漢人）とつながることが可能になり、いわゆる復古の情緒を満足させる手段だと考えられていたことがわかる。特に、周作人は章太炎先生、つまり当時名高い革命家の章炳麟の事例を取り上げ、和服を着ることが当時では一種の風潮となっていることを強調したかったのだろう。和服はこの頃、古代中国の遺風を帯びた服装として認知されており、それは留学生たちの民族意識を高める衣服でもあったのである。

実際に、辛亥革命に関わった革命家や留学生たちが和服を着用した写真が残っている図1。写真の下には、「右からの人は何天炯、章炳麟（太炎）、そして一人おいて、林文、横になっているのが黄興、学生服の美少年こそは汪精衛その人



図1 和服や学生服の中国人の集まり³⁷

である」という説明文がある³⁶。この写真は写真の中の唯一の女性前田卓子女史の親戚宅に秘蔵されているものであり、当時の中国人が著した文章を集めた『中国人的日本観』という本の口絵にもなっている写真である。説明文は、本の編集者である魚返善雄が付け加えたものと見られ

る。写真では、美少年の汪精衛のみ学生服を着用しているが、それ以外の他の中国人男性たちはすべて和服を着用している。この写真は、説明文によれば、東京牛込にあった民報社である雪の日に記念撮影したものであるという。おそらく、同盟会が結社された翌年の1906年の冬頃に撮影されたものであろう³⁸。写真の

中の中国人男性たちは全員、同盟会の会員だと思われる。ただ、なぜ汪精衛だけが学生服なのかという点、その頃、汪精衛は法政大学を卒業したばかりであり、したがって学生服の方が着慣れていたのだろうと考えられる。

4. まとめ

本稿は日清戦争後来日した中国人男子留学生の身装文化を中心に考察したものである。具体的には、留学生の身装意識の変遷過程について、異文化と交流する中で生じた摩擦の段階、そして徐々に受容する段階を考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

男子留学生たちは最初は異文化に抵抗を示したものの、後に徐々に受容し、やがて日本人の服装文化に溶け込むようになっていった。他の欧米への留学生が洋服のみを着ていたこと³⁹に比べると、日本への男子留学生には学生服や和服という選択肢があった。

清国留学生が日本に到来する際、初めて直接的に日本文化に接触し、身装生活に様々な摩擦が生じたのは実は自然なことであった。とりわけ、清国の弁髪や服装にまだ強い政治的な意味が含まれていた時代において、清国人男性は容易に日本人の服装文化を受容することはできなかったに違いない。

ところが、中華民国の時代になると、従来の弁髪や服装の政治的な意味がなくなる一方で、これまでに渡日した留学生の身装に関する情報が国内でかなり広まった結果、洋服のみならず、学生服も次第に日本に留学した男子学生の常服として用いられるようになった。さらに、男子留学生に愛着されていた学生服は中国本土に現れたり、留学生以外の中国人にも着られたりするようになった。その経緯や原因などに関しては、今後の研究課題とする。

注

- 1 本稿の中で使用する「身装文化」という言葉は高橋晴子の研究によるものである。高橋によれば、「身装」の二文字は身体と装い、具体的には服装・髪型・しぐさのことを指している。本稿では、高橋があげた三つの要素をすべて分析するのではなく、服装・髪型に加えて、身体意識について論じることにする。
- 2 実藤恵秀（1981）『中国人日本留学史』くろしお出版（増補版）、38頁。
- 3 同上。
- 4 柴田幹夫（2013）『『日華学堂日記』1898-1900年』『新潟大学国際センター紀要』第9号、新潟大学、26頁。
- 5 景梅九著、大高巖・波多野太郎訳（1966）『留日回顧』、平凡社、34-35頁。
- 6 黄尊三著・実藤恵秀訳（1986）『清国人日本留学日記』東方書店、1986年、35頁。
- 7 魯迅「藤野先生」竹内好訳（1983）『竹内好個人訳魯迅文集』第2巻、筑摩書房、147頁。
- 8 夢芸生（1906）『傷心人語』振瑣書社、52頁。
- 9 劉香織（1990）『断髪 近代東アジアの文化衝突』朝日新聞社、130-131頁。
- 10 夢芸生（1906）、51-52頁。
- 11 「清国留学生の演説」（1902年7月1日）『朝日新聞』（東京版）、朝刊第3面。
- 12 「辮を剪り服を易える説」（1903）『湖北学生界』第3号、清国留学生会館、92頁。
- 13 同上。
- 14 魯迅「病後余談—舒憤懣」（1984）『魯迅全集』第8巻＜且介亭雜文＞、北京人民文学出版社、187頁（初出『文学』第4巻第3号、1937年）。
- 15 景梅九著、大高巖・波多野太郎訳（1966）、34頁。
- 16 同上。
- 17 景梅九（1924）、34頁。
- 18 黄尊三著・実藤恵秀訳、30頁。
- 19 周建人口述・周晔編（1984）『魯迅故家的敗落』、湖南人民出版社、269頁。
- 20 増田美子編（2010）『日本衣服史』吉川弘文館、340頁。
- 21 同上。
- 22 『留学早稲田大学己酉畢業生紀念写真帖』（1909）、早稲田大学所蔵。
- 23 他は、背広のような洋服を着ている人が37名であり、和服を着ている人はわずか5名であった。その他、判断しにくい服を着ている人が2名であった。

- 24 章宗祥 (1901)『日本遊学指南』、東京都立中央図書館所蔵、凡例、頁数なし。
- 25 同上、25-26 頁。これは中国語で書かれたものであるが、ここでは実藤恵秀の翻訳を引用した。実藤恵秀前掲書、181 頁参照。
- 26 佐藤三郎の訳を引用。佐藤三郎 (2003)『中国人の見た明治日本—東遊日記の研究』東方書店、119 頁。
- 27 崇文書局編 (1905)『日本留学指掌』日本東京崇文書局出版、凡例、頁数なし。「日本を遊学」したい者、日本の学制を実際に考察したい者、また中国で学校を設立したい者、あるいは対照的に日本学制と欧米の学制を研究したい者であれば、この本が役に立つものだと言者に勧めている。また、附録として、遊覧及び観光地までもが付いている。
- 28 同上、10-11 頁。
- 29 筆者訳。
- 30 羅生門「清国留学生と日本の学生」『学生タイムス』第2巻第2号、学生タイムス社、1907 年、13 頁。
- 31 黄尊三前掲書、159-160 頁。最後の合計金額は黄が間違えたようだが、実際には 33 円 5 銭であった。
- 32 木川如一・田中亀治編訳 (1906)『東瀛遊学指南』日華堂、3 頁。『指掌』を意識した上で書かれたものかもしれないが、内容はほぼ同じである。ただし、『東瀛遊学指南』は、官立学校、陸海軍学校、私立学校、清国留学生学校、各府県学校、中学校及び女学校の章程をそれぞれ独立の章に分けて紹介している。
- 33 周作人「留學的回憶」鐘叔河編 (1998)『周作人文類編・日本管窺』、湖南文芸出版社、98 頁。
- 34 周作人「懷東京」(『宇宙風』第25号、1936 年 9 月、署名は知堂) 訳文は、信濃憂人訳編 (1941)『支那人の見た日本』東京青年書房、159 頁を参照。引用文の中、「馬掛」を「馬掛」、「楊哲子」という人名を「楊哲子」と明らかに間違えているので、本章では訂正した。
- 35 周作人「日本之再認識」鐘叔河編 (1998)『周作人文類編・日本管窺』湖南文芸出版社、87 頁 (初出『中和月刊』第3巻第1号、1942 年、署名は知堂)。
- 36 魚返善雄 (1943)『中国人的日本観』目黒書店、口絵。
- 37 同上。
- 38 筆者は写真の中の中国人が日本に滞在していた期間を考察した結果や写真の説明文に

基づいて、この写真の撮影期間は1906年の冬だと結論づけた。

- 39 「関於中国的女子留学日本」(1936年1月11日)『申報』第5張17頁。「我が国の男子(引用者)留学生は海外に渡ると、一年中に学生装や洋服を着ている」という記述が見られる。学生装は洋服から産まれた日本の制服なので、欧米へ留学した中国人男子学生が主に洋服を着ていたと推測できる。

付 記

本研究はJSPS科研費(特別研究員奨励費)17J070850の助成を受けたものである。

劉玲芳(リュウレイホウ)

(大阪大学言語文化研究科・日本学術振興会特別研究員PD)

Vicissitudes in the costume culture of Chinese in Japan

-Focusing on Chinese male international students

who came to Japan after the Sino-Japanese War-

LIU Lingfang

The Sino-Japanese War triggered the relationship between Japan and China began to reverse. For many years, Japan, which has been a student of China, has become an advantage. By reversing this position, China have to re-recognize Japan, which had been increasing its national strength with rapid momentum at that time. Furthermore, the movement to learn Japan in China eventually began. As a result, the number of Chinese visiting Japan and going abroad for study increased at once.

This paper considers Chinese male international students who came to Japan after the Sino-Japanese War. More specifically, I will discuss points in detail like what kind of costume culture problems were faced by male international students in Japan ,and what kind of internal conflicts they embraced the Japanese costume culture. This paper will clarify more clearly the transition of the awareness of Chinese students who have not necessarily been clarified until now.

As a result, the following things became clear.

Male international students initially showed resistance to different costume cultures, but later gradually accepted, and eventually began to blend into the Japanese costume culture. Compared to the fact that foreign students in other Europe and the United States were wearing only western style clothes, Chinese male international students in Japan had the option of student clothes and Japanese clothes.

When Chinese male international students arrived in Japan, it was actually natural that the first time they directly contacted Japanese culture and various friction occurred in the dressing life. In particular, in the days when the hairstyle and clothes of the Qing Dynasty still contained a strong political meaning, the Chinese male international students could not have easily accepted Japanese costume culture.